

オ

リンピック需要」に支えられる建設業界であるが、人口減少などを背景に先行きの我が国建設市場が縮小することは避けることが出来ない。今は人手不足が嘆かれているが、二〇二〇年以降のことを誰も語ろうとはしていない。建設技術者の数では、高度成長期以降減量をしなかった建築系大学出身者の深刻な余剰が近々表面化することも間違いない。そのような状況下で、建設業界および建築教育界が喫緊に取り組まなくてはいけないことは、「国際化」と「BIM化」であると私は確信している。

建設業の国際化が叫ばれて久しいが、まだ我が建設業界の国際化はまだ発展途上である。国内の受注量が減るのだから、目を真剣にベトナム、ミャンマーといった伸び盛りの東南アジアに向けるべきであることは間違いないし、特に教育については、積極的に海外に出て行って現地の人たちと堂々と渡り合える建築技術者、設計者を育成することが急務であるが、残念ながら、英語という言葉の壁があり、まだ国際化は進んでいない。その中で、二〇一三年からスタートさせた英語だけによる明治大学大学院の「建築・都市デザイン国際プロフェッショナルコース」は一学年定員約三〇名であるが、交換留学生を含めるとすでに約半数を欧米やアジアからの留学生が占め、学生たちは国籍に関係なく英語で議論し、研究やデザインに取り組んでいる。特に日本学生たちは留学生たちと切

各 人 各 説

建設業界および建築教育界に望む 「国際化」と「BIM化」

明治大学副学長・理工学部建築学科 教授

小林正美

Masami Kobayashi



磋琢磨し、語学力とともに異文化交流法を身に付け、加えて建築デザインのレベルを上げたため、幸い大手ゼネコン設計部や大手設計事務所から積極的に採用されている。こうした国際教育プログラムは、建設企業の中でも取り入れられるべきであろう。

BIM (Building Information Modeling) については、すでに多くの場所で語られているので詳述しないが、3Dソフトによる設計・監理およびファシリティーマネジメントは、間違いなく我が国の建設業界が今すぐに取り組むべき課題である。すでにシンガポール政府が確認申請図書にBIMデータの提出を義務付けており、私の親友である隈研吾くんも、海外の施主がBIMデータを要求してきているので対応せざるを得ないと言っている。以前、設計会社やゼネコンにアンケートを取ったことがあるが、各社は情報が外に流れることを恐れて、独自にソフトを購入し、各社内で一部の正社員や派遣社員で当座を賄っている状況である。しかし、近々それだけでは賄えない作業量になることは目に見えており、使用ソフトも含めて我が国全体の共通プラットフォームを整備する必要がある。逆に言えば、東京オリンピックこそは我が国の建設業界を一気にBIM化する千載一擲のチャンスである。日建連や国の主導も借りながら、BIM技術者を養成し、検定事業のような技術普及活動を行うことが急務である。